

学年全体で取り組む仲間づくり、学級づくりの在り方

～hyper-QU を活用して～

香美市立鏡野中学校 教諭 岡崎 由佳

1 はじめに

鏡野中学校は、昨年度より心の教育センターの「温かい学級づくり応援事業」の研究協力校として、学級づくりについて研究を進める機会に恵まれた。生徒の実態をより客観的にとらえるために、全校で Q-U アンケートを実施し、分析や具体的な活用について研修し、実践を積んだことは、学校全体の教育活動の活性化につながった。

加えて今年度、香美市は不登校・いじめ等対策小中連携事業の推進を委託されている。しかしながら、香美市教育研究所の調査によると、長期欠席の児童生徒は増加傾向にあり、平成 22 年 4 月現在香美市に在籍する中学生の数は 577 名のうち、11 月末現在 61 名の生徒が何らかの理由で「10 日以上欠席」している。10%強の生徒が 10 日以上休んでいる状況は大変深刻である。過去 2 年間と比較しても「30 日以上長期欠席の児童生徒の出現率」が、小学校は平成 22 年度を上回り、中学校においては平成 21・22 年度を上回っているという厳しい状況がある。

本校の昨年度の欠席状況も、「30 日以上長期欠席の生徒の出現率」は、平成 21 年度より平成 22 年度の方が、若干数値は下回ったが、予備群の存在や小学校の上昇傾向を考えると、不登校予防は不可欠であり、継続的な仲間づくり、学級づくりに取り組む必要がある。

また、本校は校区内に 6 つの小学校があり、全校児童 12 名の学校から、65 名、95 名、132 名、146 名、さらには 506 名の学校と、かなり規模の違う小学校から入学してくる。小学校とは全く条件の異なる環境の中で、新しい人間関係をつくっていかねばいけない生徒の不安やストレスは、かなり高いと考えられ、中 1 ギャップへの手立ても必要とされている。

また、人間関係をうまく構築できない生徒たちが、不登校になるのを未然に防止するためには、生徒個人の「対人関係を構築するための知識や技術（ソーシャルスキル）」の実態をつかみ、どの部分を支援するのかを把握することができれば、その課題に対する効果的な支援ができるものと考えられる。

2 研究の目的

以上の状況及び昨年度の同校研究員が今後の課題として挙げた、学年全体での取組の重要性を踏まえ、今年度の研究目的を次のように設定した。

Q-U の分析と活用を 1 年生の学年全体で取り組み、中 1 ギャップの解消を含めたよりよい仲間づくり、学級づくりの在り方について検討する。また、併せて hyper-QU も活用する。

3 研究の内容

(1) 研究の方法

Q-Uの分析と活用を、1年生の学年全体で取り組み、中1ギャップの解消を含めたよりよい仲間づくり、学級づくりの在り方について検証する。検証方法については、学年のQ-Uの全体的な変化と自学級のQ-Uの分析によって行う。また、hyper-QUの活用については実施した自学級について検討する。

(2) 研究の経過

4月	12日	(火)	心の教育センターとの打ち合わせ①
4月	14日	(木)	仲間づくり研修
5月	24日	(火)	全校学活研(2年1組:GWTを取り入れた帰りの会)
5月	27日	(金)	第1回hyper-QU実施
5月	30日	(月)	心の教育センターとの打ち合わせ②
5月	31日	(火)	学年会でhyper-QUの分析検討会 仲間づくり合宿へ向けての取組
6月	3日	(金)	在校研究員連絡協議会① 心の教育センターとの打ち合わせ③
6月	13日	(月)	心の教育センターとの打ち合わせ④
6月	20日(月)~21日		仲間づくり合宿
7月	4日	(月)	全校Q-U分析検討会① 心の教育センターとの打ち合わせ⑤
8月	1日	(月)	学級づくりリーダー養成研修会Ⅲ参加
8月	29日	(月)	スーパーバイザー研修会・中間検討会 心の教育センターとの打ち合わせ⑥
10月	6日	(木)	第2回hyper-QU実施
10月	25日	(火)	学年会でhyper-QU分析検討会
10月	28日	(金)	在校研究員連絡協議会② 心の教育センターとの打ち合わせ⑦
11月	2日	(水)	全校Q-U分析活用検討会② 心の教育センターとの打ち合わせ⑧
11月	8日	(火)	学年会にて今後の課題設定と実践計画
平成24年1月	10日		学年会・仲間づくり部会にて成果と課題の検討
2月	23日	(木)	学級づくりリーダー養成研修会Ⅵにて実践報告

(3) 1回目Q-Uの結果と分析

5月27日に実施した1回目Q-Uの結果を踏まえ、学年会での分析検討会を開き、学年全体で取り組むこと及びそれぞれの学級に応じた取組を検討、確認を行った。

まず、学年全体では非承認群が多い傾向にあり、リレーションづくりを意識して取り組む必要性を確認した。さらに、要支援群の生徒には個別対応(面談等)、ヘルプシグナル該当の生徒にも学年全体で声かけを行い、まずは教師との人間関係をつくっていきこうという方針を立てた。そして、次の仲間づくり合宿を活用してルールやマナーを守れる取組とともに、リレーションづくりを意識することとし、そのためにQ-Uの結果から、配慮や支援が必要と考えられる生徒をピックアップして、その情報を学年で共有した。

一方、自学級においては侵害行為認知群が比較的多く「ゆるみのみられる学級集団」との判定であった。学級内に自由な雰囲気があり、活気があるのは良い点だが、みんなが活動する際のルールや行動規範の定着に不十分さが見られ、なれあいやゆるみが生じていることが考えられた。また、どういうところに課題があるかを質問項目への回答状況で分析した結果、個人が自由に意見を言い合える関係がまだできていないということが明

らかになった。そこで、学級では「二者択一」などの構成的グループエンカウンター（以下SGE）を取り入れ、相手の話を聞く態勢をつくっていくことを重視した。そして、特に承認感の低い2名の生徒（A、B）に配慮していくとともに、学級全体が安心できる雰囲気づくりに意識して取り組もうと考えた。

また、ソーシャルスキル尺度の結果は、「配慮」と「かかわり」の両得点ともに全国とほぼ同じ程度であった。生徒たちは緊張感も比較的少なく、自由に生活や活動をしていると考えられる一方で、自己主張ができ満足感を感じている生徒たちと、自分の思いをうまく伝えることができずに学校生活を送っている生徒たちに分離している可能性も考えられた。そこで、hyper-QUの生徒用の個人票を面談時に渡し、一緒に話し合った。

また、裏面のワークシートは夏休みに記入させ、自分の「現在地」を確認させた。その上で「配慮」のスキルを学級に定着させると良いという結果だったので、2学期の授業や様々な活動の場面で、良いモデルとなる生徒の行動を全体の前で積極的にほめたり、目標となるスキルを定めて、朝や帰りの会を構成的に展開したり、係活動や生活班の小グループでの話し合いを定期的実施したり、それを意識的に評価した。スキルの定着が低い生徒には、個人的に面談したり、生活日記に具体的な助言をしたりした。

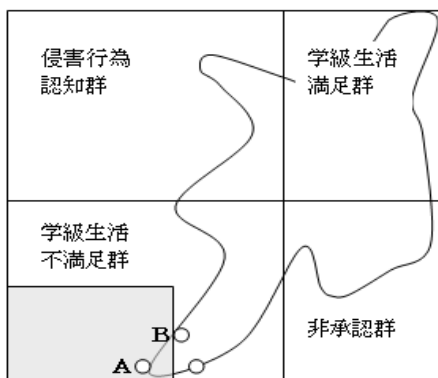


図1 自学級における1回目
学級満足度尺度の結果

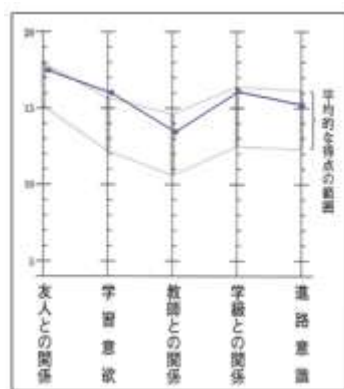


図2 自学級における1回目
学校生活意欲尺度の結果

「配慮」のスキル 31.1
「かかわり」のスキル 27.3

図3 自学級における1回目
ソーシャルスキル集計結果

(4) 仲間づくり合宿

6月20日から、1泊2日の仲間づくり合宿を行った。ルールやマナーを守りながら、生徒たちの自己肯定感が高まることと、生徒のリーダーを少しでも多く活躍させることをねらい、実行委員会を組織し、①楽しく活動するために協力しよう、②相手の良いところを見つけて伝え合おう、③きまりを守って集団行動しようという3つの目標を立てて実施した。

しかし、ここで4月と大きく変容した生徒たちの姿に直面する。1回目 Q-U の見立てからも予想はついたため、教員側も自分たちなりに手立てをして臨んだつもりであったが、集団行動に必要なルールやマナーを守るといにはほど遠い現実があった。生徒たちの求める「楽しさ」と教師側の感じてほしい「楽しさ」にギャップがあった。担任としてその価値付けを行ってきたつもりでも、集団が大きくなればなるほど、生徒たちは楽な方へ流されていき、結果として2学期に課題を多く残した合宿となった。

(5) スーパーバイザー研修会

8月29日には、8月1日に行われた河村茂雄先生の学級づくりリーダー養成研修会の中でも取り上げられていた杉並区立天沼中学校校長の藤川章先生を迎えて、仲間づくりの校内研修を実施した。Q-Uを活用した支援会議の在り方や、2学期の運動会に向けて活用できるSGEを具体的に教えていただくことができた。

(6) 2学期に向けて

夏休みの学年会で生徒の現状を踏まえ、学年団として次の6点について確認した。

- ①できていることやできている生徒をほめる（様々な立場から支援）
- ②班会や班長会を仕組み、生徒同士で話し合える雰囲気をつくる（学級でも1対33、教師対生徒にならない）
- ③学年団全員で、あきらめず根気強く指導し続ける（一人で背負わない）
- ④少しでも気になる生徒には面談をする
- ⑤家庭との協力を密にする
- ⑥授業に学び合いを仕組む（4人班を活用する）

また、全校でも運動会に向けて、昨年同様Q-Uをもとにして気になる生徒をピックアップし、職員会で共通理解を図った。特に1・2年生は、4学級を5色に分けるため、教員側も学級が解体した状態を取り組まなければならない。昨年もこの情報交換会が大変役に立った。

さらに、仲間づくり部会から2つの取組が提案された。1点目は毎週月曜日に30分の班長会を定例化することで、これにより計画的・継続的な取組が実施できるようになり、1年生では、掃除への取組が2学期のメインとして実施された。また、各学級の班長会が発信した取組に、他の学級が刺激を受けて相乗効果も見られた。1年生では「給食タイムアタック」「いいことあった木」の作製、学級レクリエーション等を実施した。

2点目は、毎週水曜日の帰りの会を「仲間づくり学活の日」とし、グループワークトレーニング（GWT）やソーシャルスキルトレーニング（SST）を取り入れることであった。1年生では「みんなでストレスチェック」「みんなで間違い探し」「新聞タワー」「無関心ゲーム」「むしむし教室の席替え」「あいさつドッキリチェック」「勘弁してよ！こんな話の聞き方」等のエクササイズを行った。昨年度の在校研究員が、2学期以降学級の班替えのたびにGWTやSGEを取り入れた成果を校内研修でも発表してくれていたため、その流れを今年は何とか全校に広げることができた。計画的、定期的、意識的にこの取組を継続させるには、年間計画が必要ということで、その作成が仲間づくり部会としての、次年度への課題となっている。

(7) 座席表の工夫

本校では班を替えるごとに座席表を作り、学年団、教科担任、管理職、支援員に配付しているが、2回目のQ-Uの実施後からは、その座席表に生徒のプロット図の位置（例：非承認群＝2）の数字等を書いて、机間指導や学習指導に活用してもらうことを始めた。この座席表は、取り扱いに注意が必要という留意点はあるが、班活動を強化し生徒同士のかかわりを強めるために、具体的にこういう活動を取り入れてほしいとか、この生徒

はこんなところをほめてやってほしいということを、担任から教科担任に伝える時に、分かりやすいという利点もあり、支援に入ってもらいやすかった。また、日々の生徒観察にも有効であった。今後、教科指導にも Q-U をより効果的に活用していければと思う。

(8) 進路学習会

2 学期からは学び合いを仕組み、今日の課題を明確に示し、グループ学習を取り入れ、授業評価のめあても生徒たちと相談しながら 1 年生独自のものを作った。しかし 1 年生ではなかなか進路への実感がわかないため、授業を大切にするという意識がどうしても低い。そこで、高校の体験入学が始まる 9 月に、3 年生を対象として進路学習会を計画した。高知県教育委員会高等学校課から木村卓生指導主事を招き、講話をいただいた。保護者にも参加を呼びかけ、家庭でも話をしてもらおうきっかけとした。

(9) 保護者や地域との連携

保護者の方々も、役員だけでなく全校体勢で朝のあいさつ運動を行うことや「ありがとうの木」の作製、読み聞かせボランティア等、積極的に企画を考えて活動してくれている。定期的な学級懇談会も、保護者からの働きかけで実現し、継続中である。また、12 月 8 日には学校側の研修と PTA 研修部の講座をタイアップさせ、玉川大学難波克己准教授の講演会が実施された。思春期の子どもたちが豊かに生きていくために、そしてよりよい育ちを支えていくには、親のかかわりはどうあったら良いのか、日ごろの子育てへのヒントをたくさん話していただき、具体的なノウハウを求めて集まった参加者に大変好評だった。

さらに、生徒会執行部と PTA が協力して「鏡野あったかプロジェクト～出会い、ふれあい、おもしろ～」が始動し、土佐山田町全体であいさつ運動に取り組むことを学校から発信した。その企画の一環として「笑顔がいちばん」というあいさつ運動推進の歌を、執行部作詞、PTA 会長作曲で完成させ、チャリティーコンサート等で発表して、町内へ広めているところである。この取組がうまくいけば、生徒たちは大きな自信と、これまで以上のあたたかい気持ちで、地域とつながっていけると思う。

(10) 2 回目 hyper-QU の結果と分析

10 月 6 日に 2 回目の hyper-QU を実施した。学年全体としては、被侵害得点の分布の広がりや気になる結果が出ており、学級に正義が通らず、むしろ満足群の中の一部の生徒たちに指導が必要ではないかと思われる傾向が見られた。「善悪」で指導の通らない生徒には、時には「損得」で話をするなど、伝え方にも工夫をすること、また、日記や作文、アンケートに出てくる生徒の正当な意見を日ごろからしっかり拾い上げ、地道に返していくこと等、肯定的評価を続けていくことが大事であることを確認した。

昨年の研究にも共通することだが、本校は女子と比較して男子の承認得点が低い傾向が見られる。細やかな生徒観察からたくさんの承認ポイントを見つけ、名前を呼びながら声をかけ、具体的な行いをほめることを続けていきたい。また、ヘルプシグナルの質問項目に着目して個人面談を行ったことにより、2 回目の Q-U では、実施後の手立てで要支援群から抜け出した生徒もいた。

また、自学級は「かたさのみられる学級集団」と判定され、1 回目の「ゆるみのみられる学級集団」から変化が見られた。

学級内にルールや行動規範は十分定着してきたと考えられるので、承認感の低い3名の生徒が、活躍できる場面や認められる機会を、授業や学級活動、学級生活に意識して取り入れることが求められていた。分析結果によると、承認感の低い生徒たちを叱咤激励する前に、その生徒たちが現在できていること、やれていることを言葉にして認めることがより必要であり、生徒同士の人間関係づくりのためにSGE等の取組を意識して定期的に取り入れることが効果的であるというアドバイスが書かれてあった。一方、学校生活意欲総合点の学級平均は高くなっていたが、一人ひとりの得点のばらつきが一定の大きさで現れていて、承認感と学校生活意欲の低い生徒たちは、学級内で自分らしく充実した生活を送ることができているとは思えない状況も見られるという結果だった。その変化のほとんどは、日ごろの生徒観察の中から納得できるものであることは、担任・副担任共に共通の意見であった。1回目の結果で配慮していた2名に注目すると、1名の男子はほとんど変化しておらず、枠外の要支援群、もう1名の女子は取組の成果があり、承認得点が向上していた。2回目の結果から考えられる指針としては、活動した結果だけでなく、地道な努力や裏方の働きなど、多様な視点でのチェック項目を設定して、生徒同士でお互いに評価し合えるような取組を取り入れ、目立たない生徒たちにも注意が向く工夫をする必要性が考えられた。また、承認感の高い生徒たちは、教師が言わなくても周りの生徒たちが評価をしてくれるので、教師は、承認感と学校生活意欲の低い生徒たちの行動をよく見ておき、意識して全体の前で発表する等の能動的な対応が示されていた。

学年会での自学級の分析から、意欲が比較的高く、教師との関係が上昇しているのが強みであることが分かり、まずは教師との人間関係づくりをめざした1回目実施後の取組の成果は見られたと思われる。また、ルールの定着度から見て、学級全体が安心できる雰囲気づくりに意識して取り組んだ成果も一定あったのではないかとのことであった。

今後はルールやリレーシヨンの確立した、より安心できる「親和的なまとまりのある学級」を目指して、「相手の話をきちんと聴けることは、相手を大切にすること。相手を大切にすると自分も大切にされる」という、相手の話を聴く態勢をつくっていくことに継続して取り組んでいきたい。また、班替えの方法もリーダーの意識と行動を育てる目的で、2学期までは班長会で決めるシステムをとってきたが、正義が通る土壌はできつつあるので、3学期はリレーシヨンづくりの強化を目的に、昨年の実践を参考に、くじによる席替えで班替えを行った。班を替えた際にはGWTを行い、協力することや同じ班になった仲間を認めることを意識させてからスタートした。この取組が、2年生のクラス替えの時に大いに役立つと思う。

さらに、ソーシャルスキル尺度の結果は、第1回目同様「配慮」と「かかわり」の両得点ともに全国とほぼ同じ程度であったが、得点自体は少し下がっていた。ルールや行動規範が共有されており、学級内で大きなトラブルは起きにくい、生徒たちの友人関係が限定的であったり、全体の前で自分を出すことに抵抗を感じたりする生徒がいて、生徒個々の承認感の差が大きくなっていると考えられた。対応策として、友人に対する

「配慮」のスキルや友人と積極的・能動的に関わる「かかわり」のスキルを伸ばすことによって、学級をまとまりのある集団へと育成していくことができるという判定があったので、今後は活動での一区切りごとに、短時間の小グループでの認め合い活動をこまめに取り入れ、まずは「配慮」のスキルに注目していく。「友人の気持ちを考えながら話すこと」や「友人の話は最後まで聴く」などのスキルをより伸ばすように意識し、教師がモデルとなる生徒の行動を適宜とらえて全体の前で積極的にほめたり、生徒に一週間の中で、「うれしかった一言」等を書かせて交換させたりして相互評価を行うことに取り組んでいる。

学級経営では、教師の指導や仲間の支援を多く必要とする生徒が2割、比較的真面目に落ち着いた学校生活を送れている生徒が2割、そのどちらの要素も持ち、雰囲気次第でどちらにもなる可能性のある生徒が6割、この3つに分類できると言われている。その中でも3次の支援ニーズのある生徒をクローズアップしがちだが、それよりも6割を占める中間層の元気な生徒たちへの指導に重点をおき、全体の雰囲気を良い方向にはぐくんでいくことに力を注ぎたい。全校活動においても、生徒のリーダーである執行部は非常に頑張っており、この生徒たちの努力や学校を思う気持ちに、教師として応えたいという思いが強い。1年生の中にも、先輩の姿に憧れ、後期生徒会役員選挙では7名定員のところへ4名が立候補し、2名が当選した。生徒同士の縦のつながり横のつながりを大切にしながら、これからも生徒たちの力を伸ばす支援を続けていきたい。

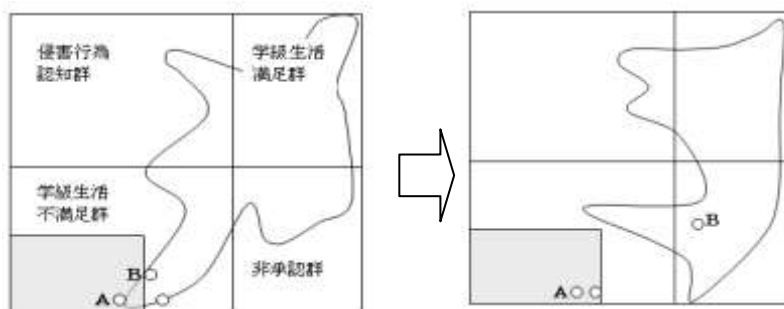


図4 自学級における学級満足度尺度の変化

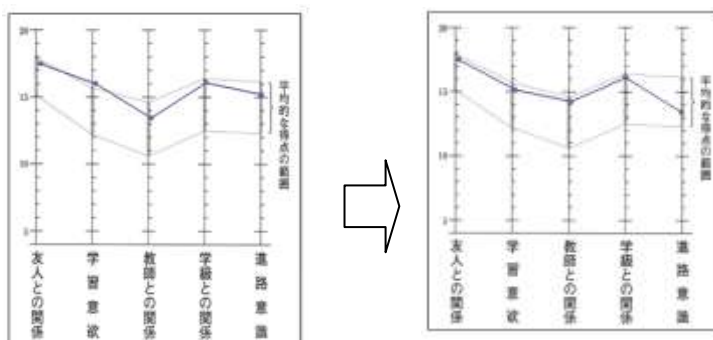


図5 自学級における学校生活意欲尺度の変化

「配慮」のスキル	31.1	⇒	「配慮」のスキル	29.7
「かかわり」のスキル	27.3		「かかわり」のスキル	26.6

図6 自学級におけるソーシャルスキルの変化

4 成果と課題

初めからうまくいかなかったでもいいからまずは試行！その気持ちで良いと励まされて、今年の研究員を引き受けたのだが、取り組んだだけの成果があった。hyper-QUは、小学校から引き継ぎを受けていた要支援の生徒のアセスメントにも非常に役立った。また、1回目の個人票は面談で保護者と一緒に説明し、2回目は学活でワークシートの記入まで細かく取り組んだ後に、個別の面談をとって活用することができた。現在自学級に不登校傾向の生徒がおらず、校内合唱コンクールでも全員一緒に歌えたのは、日々の積み重ねの成果だと思う。

Q-Uを開発された早稲田大学教授の河村茂雄先生は、これからの教員には「人間関係をうまくサポートできる力」が必要だと言われていたが、まさにその通りだと思う。すべての子どもの人権は等しいけれど、援助ニーズは違い、そのレベルに合った対応を求められている教員にとって、Q-Uやhyper-QUは非常にありがたいツールである。今年は、昨年以上に生徒のアセスメントを行い、hyper-QUの内容をもとに、教員同士が生徒の話題を出し合ったり、生徒とコミュニケーションをとるために活用しようとした。1年生で実施したスクールカウンセラーによるSGEの事前資料としても活用できた。当初の仮説通り、hyper-QUを活用すれば、生徒一人ひとりの詳細な情報が分かり、個別のアセスメントにも有効性が増すこと、そして、その活用によって早めの支援が可能となり、よりよい仲間づくりをすることが可能である。

5月18日の校内研修で、高知県心の教育センター野中指導主事から、これからの集団づくりの概念図が提示された。「①教職員がつながる（集団づくり）→②子どもを見つめる（児童生徒理解）→③学級づくり（学級マネジメント）→④子どもと教師がつながる→⑤子ども同士をつなぐ（人間関係づくり）→⑥子ども同士が深くつながる（仲間づくり）→⑦対立から対等の集団へ（集団づくり）」である。生徒たちが毎日安心して学校に通ってこられる「温かい学級づくり」を推進していこうと日々取り組んではいるが、まだまだ課題も多い。

課題の一つとしてあげられるのが、教師が成果にもっと目を向けるということである。私たちはややもすると何事も課題の方に目が行きがちで、成果を発信したりアピールしたりすることをおろそかにしがちである。人間もそうである。完璧な人間はいない。その生徒の成果に目を向け評価することで、その生徒は輝く。Q-Uやhyper-QUは、世代の違う生徒たちの心理を私たち教員に教えてくれる。

生徒は砥石のような鋭い感性をもっており、私たち教員は今、そのやる気・本気を試されているような気さえしている。やらずに後悔するよりやって何かを生み出したい。今の時代、生徒の変容は著しく感覚で勝負できる時代ではないからこそ、本校の拙い実践が、学校現場において調査法の有効活用を進める一助になればと思う。

<参考・引用資料>

1. 國分康孝監修「エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ Part 2」 図書文化 2001
2. 河村茂雄・品田笑子・小野寺正己編著 「いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル 中学校」 図書文化 2008
3. 河村茂雄他企画・編集「Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド 中学校編」 図書文化 2004
4. 上條晴夫編 「中学校学級担任のためのファックス資料集」 民衆社 1998
5. 財団法人 応用教育研究所発行「応研レポートNo.76 特集：Q-U・hyper-QU」
6. 香美市立教育研究所発行「研究所だより第17号」 2011